

子ども支援における「居場所づくり」実践の意義  
 —子どもの困難に向き合う「居場所づくり」実践例から—

○ 同志社大学大学院 氏名 佐々木 瞳 (009440)

キーワード：子ども，支援，居場所づくり

### 1. 研究目的

本研究の目的は、子どもを対象として各地で取り組まれている「居場所づくり」実践について、とくに困難を抱える子どもの支援における意義を見出すことである。

子どもが抱える困難は、「経済的な困窮，いじめ，不登校，ひきこもり，障害，虐待など，非常に多岐にわたるものであり，また，いくつかの困難が複合的にあらわれ，その困難をさらに複雑なものとしているケースもみられる」（内閣府 2018）. 子どもひとりひとりの状況に応じたきめ細かな支援が必要であるといえる。

こうしたなか，子どもの生活や育ちに関与するさまざまな実践現場において，「居場所づくり」が掲げられる．実際に子どもの「居場所」としての意図的な場をもうける場合だけでなく，特定の目的をもつ取り組みの理念として，その場が子どもにとって「居場所」となることをめざす場合もある．「居場所づくり」という共通の名をもちながら，その意味するものは多様である．

そうした「居場所づくり」実践は，必ずしも困難を抱える子どもへの支援を前提とするわけではない．すべての子どもたちに開かれた取り組みとして行われる場合も多い．しかし，すべての子どもたちのよりよい生活や成長を考えるうえで，すでに述べたような子どもをとりまく困難な状況に向き合うことは不可欠であり，大前提であるともいえる．「居場所づくり」実践に対してもこのような視点が求められるのではないだろうか．

### 2. 研究の視点および方法

「居場所づくり」実践について記述された文献のうち，とくに子どもの困難と向き合っている実践例に着目しつつ文献研究を行う．個々の実践の様子や，そこでみられる効果にとどまらず，困難を抱える子どもに対する支援全体を想定するなか「居場所づくり」実践を位置づけ，その支援において「居場所づくり」がいかなる意義をもつか，またどのような「居場所づくり」実践であるべきかを検討したい．

### 3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会研究倫理規程，および研究倫理規程にもとづく研究ガイドラインに従い，倫理的配慮を行う．

### 4. 研究結果

困難を抱える子どもに対する支援において「居場所づくり」実践に見出される意義について，以下のように要約した．なお，研究に用いた文献リストは発表当日に配布する．

- ・ 生活支援：食事・おやつの提供や学習支援，安全な遊び場の確保など，そこで行われること自体が，とりわけ困難を抱える子どもたちの生活に失われがちなものを直接補

うこととなる。「子ども食堂」のはじまりは、家庭の事情から日々の食生活が満たされない子どもへあたたかい食事を提供する取り組みであったという。

- ・ 多様な経験：困難な状況に置かれていることで、他者とのかかわりが乏しくなったり、季節行事等の体験がしにくくなったりすることが考えられる。「居場所づくり」の活動のなかで、子どもたちに調理や季節に応じた体験などを提供する例はしばしばみられる。
- ・ 主体性のもととなる安心：大人や仲間とのかかわりやその場の雰囲気などによって子どもが安心できる場所となる様子が描写されることが多い。子どもの困難に向き合いその生活を支援していくとき、子ども自身の主体性や意欲がなければ本当に子どもの最善の利益を保障することはできない。その主体性のためにはまず自分の存在を受け入れてもらえるという安心感が必要となる。
- ・ ニーズキャッチ：「居場所づくり」実践を通して、子どもの困難が発見されることがある。
- ・ 相談しやすい場：子どもや保護者が、何らかの困難を抱え支援を求めているも、専門機関や相談窓口を訪れることは敷居が高い場合や、物理的に難しい場合、またそうした情報・知識すらもたない場合がある。「居場所づくり」実践の場では気楽に困りごとなどを相談することができると考えられる。
- ・ 適切な支援へのつなぎ：子どもの困難に気付いたり、子どもや保護者から困難な状況が打ち明けられたりした場合に、その「居場所づくり」実践のなかで直接支援していくだけではなく、適切な支援を受けられる機関や制度の情報の提供や手続きのサポートをすることができる。

## 5. 考察

困難を抱える子どもを「居場所づくり」実践によって支える、という考えにとどまらず、困難を抱える子どもへの支援全体において「居場所づくり」実践がどのような意義をもつか、という視点に立ち、検討してきた。子ども支援における「居場所づくり」実践の役割が見出されたとも言いかえられる。専門的な支援と比較した際の、心理的な抵抗の低さや、多様な人々とのふれあいなどがその中心にあると考えられる。また、そのような役割をふまえたうで再度「居場所づくり」実践のあり方を考察すれば、地域住民や学生のボランティアなど非専門職によって担うことが可能、ひいては望ましい部分がある一方、ニーズキャッチや支援のつなぎなどには、ソーシャルワークの視点も求められることが示唆される。今後、子ども支援における「居場所づくり」実践の意義を明確にしていくため、子どもの困難に向き合う専門職が実際に「居場所づくり」実践をどのようにとらえ、支援のうえでどのように活かされているのかについてインタビュー調査等を行っていきたい。

【引用】内閣府(2018)「平成30年版 子供・若者白書」([https://www8.cao.go.jp/youth/whitpaper/h30honpen/s3\\_1.html](https://www8.cao.go.jp/youth/whitpaper/h30honpen/s3_1.html), 2019.5.13)